熟老の年賀状

顧問　上　泰二

平成二十二年元旦の賀状に、「謹賀新年」に次いで、茶山詩を拝借、「熟老七十五『卻幸多年違會面　夢中仍見舊時姿　菅茶山』の心情に共感的理解・・・」と書き出した。それ以降、このスタイルを踏襲した。

「有感」　菅茶山　75歳　遺稿巻二ー三

偶然臨鏡鬢如絲　偶然鏡に臨めば鬢絲の如し
千里知君亦老衰　千里知る君亦老い衰うるを
卻幸多年違會面　卻って幸とする多年會面に違い
夢中仍見舊時姿　夢中、仍見る舊時の姿

の詩中、第三・四聯からの引用である。

(文意)「偶々、鏡に向かい、鬢の毛が白く糸のようになっているのに吃驚した。さこそこのように、遠く離れた旧友も老い衰えていることだろう。お互いに会う機会がなくて却って幸いか。何時いつまでも、若く瑞々しい昔の姿を夢見ていられるのではないか」

この前年、再就職先を退職、当時の井上謙二副会長の勧誘を断り切れず本会へ入会。武村充大編集長下、会報編集業務に携わることになった。

当時、「茶山会報に茶山詩が一首もないとは?」との批判が寄せられていた時代。筆者、固より、昭和二桁代のチンプン漢文族、畑違い役向きに周章狼狽、走りながら、専ら先人の足跡を道標に剽窃紛いの記事を書きはじめた。一方、可能なかぎり、市内外の公民館等主催歴史講座や県博「茶山関係資料」等の常設展示会などに出席、取材を兼ね学習を重ねた。

十年一昔。顧みれば、その未熟さに冷や汗を超え、慚愧の念すら覚えることしきり。友は、概ね「茶山先生80歳の元旦にして、『「廻頭志業一無成」と回顧している』と慰留してくれるが、足許にも寄れない。天地の差。ともあれ、これを機に、賀状に、同年代の茶山詩を引用することが多くなった。

平成三十年の賀状では、

「酔聞童子論耆舊　驚見吾齢長一郷　菅茶山」(77歳　元旦　遺稿巻三)を引用している。

元旦　菅茶山　遺稿巻三

鶴髪皤皤映羽觴　鶴髪　皤皤　羽觴に映じ
屠蘇憶昨最先嘗　屠蘇憶う　昨　最も先に嘗しを
酔聞童子論耆舊　酔ふて聞けば童子の耆舊を論ず
驚見吾齢長一郷　驚き見る吾が齢一郷に長たるを

(文意)最年少者から順次高年者へ廻すのが礼式の屠蘇の杯に、自らの白髪が映し出されている。ついこの間まで、自分が真っ先に飲んでいたと思うのに、酔ってそれとなく耳を傾けていると、若者たちが誰が最年長かを論じ合っている。**自分が郷里の最長老だ**　と話しているのに吃驚。

令和3年、熟翁、86歳、傘寿以降、当該年齢相当の茶山詩もないばかりか、気がつけば**「吾齢長社友」**。老兵は消えゆくのみか。コロナ禍が寂寥に拍車をかける。唯々、茶翁が歳末・初春の詩中、不変・不屈の結聯に倣って顕彰会の「一時迎歳又迎春」(「元日立春戊寅」後編巻八)を祈願してやまない。